中国紅茶の旅（2）

広東商人が作らせた宜紅

須賀 努＝文・写真

湖北省は、日本人にとってあまりなじみのない場所だ。ましてや、ここに茶畑があり、その昔はこの地で大量の茶葉が作られ、輸出されていたことなど、知る人は決して多くない。だが記録によれば明治8年に紅茶製造の調査のため、明治20年には製茶研修を目的として、日本政府は武漢および周辺の茶産地に人員を派遣したという。この事実からその当時、輸出用茶葉の生産において、湖北省が一大拠点だったことがおぼろげながら分かってくる。

そんな情報をもとに、今回は宜都という紅茶の産地へ向かった。現代の中国は本当に便利になっている。漢口から宜昌まで列車で2時間、宜昌から宜都までバスで1時間あれば行ける。20年前はバスで8時間かかったとの話もある場所へ、今や3時間で行ける時代である。では茶葉の輸出が盛んだった150年前は一体どうやって、どのくらいの時間がかかったのだろうか。

広東から遠い湖北でなぜ？

1820年代、現在の湖北省宜都の山の中、五峰トゥチャ（土家）族自治県に広東商人、釣大福が入って行った。彼はここの茶葉が紅茶に向いていると判断し、少数民族に紅茶の作り方を教えた。そして作られた茶を、宜昌、漢口経由で広東に運び、そこからヨーロッパへの輸出を図ったと言われている。この時期、一体なぜ広東からわざわざ遠く離れた湖北省まで来て、紅茶（宜紅）を作らせたのだろうか。

宜都のバスターミナルから車に乗り、大河長江のほとりに出た。支流の川、清江と交差するその場所に今回訪ねた宜紅茶業があった。水運が主要な輸送手段だった時代、茶工場がこのあたりにあったことは十分にうなずける。現在はより交通が便利な場所に新しい工場を建てているが、昔は川のあるところに茶があった、ということだろう。

五峰は唐代にはすでに茶畑があったといわれる古い茶産地であり、山中の少数民族が茶を作っていたと思われる。1820年代といえば、清朝は対外貿易を広東一港に制限していた時代。だが実際には北の窓口としてキャフタが開いており、ロシアへの茶葉の輸出が進んでいた。ヨーロッパへ海のルートで茶葉を輸出したい広東商人は、河口経由の福建茶葉だけでは足りずに、他の茶葉を押さえる必要があったのだろう。そしてその茶葉は紅茶でなければならなかったため、従来作られていた緑茶を紅茶に切り替えさせたに違いない。

須賀 努（すが・つとむ）
茶旅人、1961年東京生まれ。上海語学留学、北京、香港、台北で合計17年滞在。「茶旅」でアジア各地の茶畑、茶荘などを訪ね歩く。

美しい宜紅の茶葉　茶工場近くの実験茶園

ブレンドの原料にされる

2度のアヘン戦争を経て、61年に漢口が対外開放され、宜紅の生産量も80年代には最盛期を迎えた。だがその後は、他の中国紅茶同様、安価なインドやスリランカ茶に押されて、衰退していき、新中国成立後は、国営の宜都茶廠として引き継がれた。

対外輸出は改革開放後の1980年代も広州を中心に行われていた。当時広州の茶葉輸出入公司に勤務していた女性に宜紅について聞いてみた。

「宜紅はヨーロッパ人に比較的好まれる紅茶ではあるが、30年前は他の茶葉、例えば雲南から広東に移植された茶樹の葉とブレンドするための原料だった。だからこのブランド名は歴史上消えていたと言ってよい」と説明してくれた。確かに中国紅茶にしては渋みもある。

進む国内市場開拓

今世紀に入り民営化され、宜紅茶業となり、地方政府が企業努力を後押しする形で、宜紅ブランドの復活が模索されている。「これからは国内市場を伸ばしいく。従来90％以上が輸出だったが、現在20～30％は国内市場向けになり、認知度が上がっている」と同社の章副総経理は語る。

紅茶というのはある意味でブレンドが基本だが、一般の中国茶はブレンドしないのが基本。現在では中国から輸出する時点ではブレンドしていなくても、ヨーロッパ市場に運ばれて他の茶葉と混ぜられ、彼らの好みに仕上げられていく。そんな中で個別ブランドを確立していくのは難しいが、新たに国内市場が開拓された今、中国人が求める紅茶作りが課題となっている。♣